

# グランド・コミッショナース

最も高度で複雑なタイムピースを所有するという執念を持った2人の男。彼らの物語は、20世紀初頭、収集という行為に対するアメリカのエリートたちの態度が、根本的な変貌を見せたことを我々に教えてくれる。 文 デイヴィッド・アーノルド 翻訳 小金井良夫

1865年の南北戦争終結から1929年の株式市場大暴落までのごく短期間のうちに、アメリカはヨーロッパの影として存在から、グローバルな超大国に変身した。当時は産業変革と技術成長の顕著な時代であり、一部の人々に想像を絶する富をもたらした時代でもあった。マーク・トウェインが1873年に書いた同名の小説に倣って「金びか時代」と呼ばれたこの時期のアメリカは、巨万の富を築いた大実業家を輩出し、それと共に富裕層固有の文化を生み出すに至ったのである。

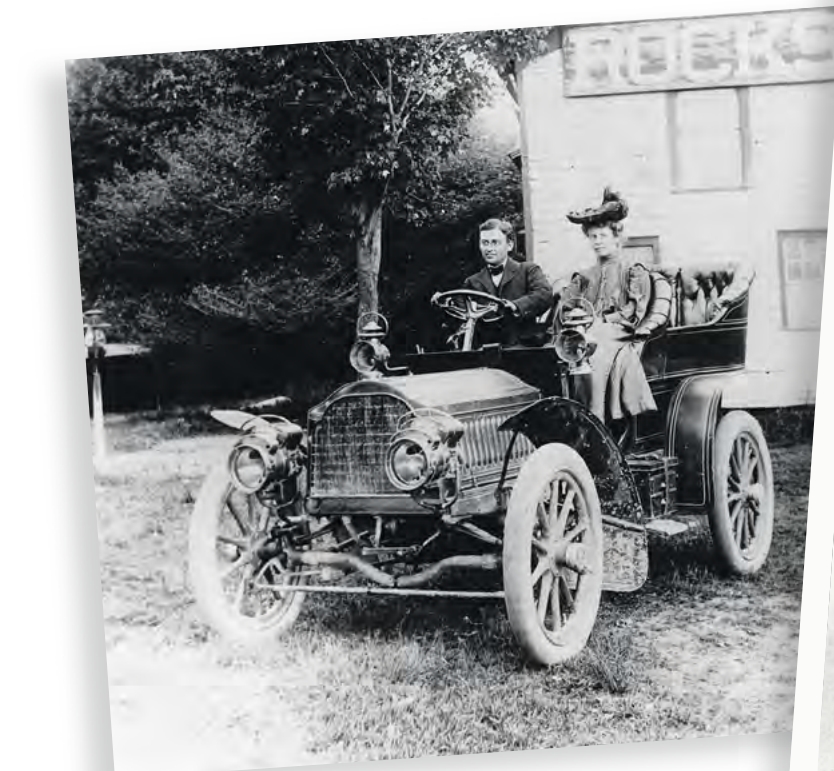
カーネギー、ロックフェラー、ヴァンダービルト家などがまったく新たな貴族社会をつくり上げた。彼らはあり余る富に囲まれ、すべてが贅沢の二色で埋め尽くされた。莫大な財産の形成には、例外なく惜しみない浪費が続き、王侯の居城に似せた大邸宅が建設された。電気が一世を風靡していた1883年、ヴァンダービルト家の舞踏会では、コネリアス・ヴァンダービルト二世夫人が、電池を中に仕込み、全体が電球のように輝く、ダイヤモンドを散りばめた純白のサテンドレスを着用して全ニューヨーク社交界を驚かせた。またシカゴの実業家コネリアス・キングスレー・ギヤリソン・ピリングスは、マンハッタンの厩舎の落成式に際し、舞踏ホールの中で当然のことのように馬にまたがり、36人の招待客に夕食を供した。こうした富の誇示は、経済的、社会的な亀裂の拡大を暗示するものでもあった。

しかしこのような狭い世界での大げさな振る舞いがきっかけとなって「洗練された趣味を持った大実業家」という概念が芽生えた。少数の金持ちたちは、財産がもたらしてくれる文化や洗練といったもの身にまとい始めた。さらに、事業における競争や相手を出し抜く習性が、やがて社会生活においても、大勝利を収めなければならぬという猛烈な欲求となって現れてきたのである。かくして芸術は狩猟の対象となった。アメリカの大富豪たちは、今や何のためにもなく歴史的名画、タペストリー、彫刻、およびヨーロッパのすべての歴史的資産への熱狂的な傾倒を表明し始めた。彼らによる芸術作品の個人コレクションが基となって、後にニューヨーク・フリック・コレクション、メトロポリタン美術館を含むアメリカの最も重要な公的美術館が創設されたのである。それと時を同じくしてアメリカ富裕層の高級時計への関心が強まっていく。

20世紀初頭の頃、アメリカの新興成金の間で、アンティーク時計は、大邸宅の壁に掛けられた歴史的名画のように見られていた。富の象徴であり、適切な歴史的由来を語ることでできる収集品だったのである。とりわけ銀行家ジョン・ピアポント・モルガンは、1800年にナポレオンがナポリ王に贈ったミュージカル・ウォッチを含む200個以上のタイムピースを所有していた。しかし20世紀における時計への情熱を語る上で、他を圧倒して重要な愛好家、収集家としては、ジェームズ・ウォード・バックカードとヘンリー・グレーブス・ジュニアの名を挙げないわけにはいかない。叩き上げの企業家バックカードと、ウォール・ストリートの資産家の御曹司グレーブスは、いずれもアメリカ的成功を象徴するような人物である。この2人が時計収集というものの本質を多くの意味で変えることになった。2人は生き方も性格も異なっていたが、この世で最も複雑なタイムピースを手に入れる、という同一の執念を持っていた。そして2人は、この神秘的な野望を実現させるため、期せずしてパテックフィリップに向かったのである。15世紀以来の時計製作技術と20世紀的欲望が融合した結果、この2人は以後30年間にわたり、驚異的な成果を世に残すことになった。



【次ページ】  
ニューヨークの銀行家ヘンリー・グレーブス・ジュニア（上段）は、美術品、希少コイン、中国産の磁器、卓越したタイムピースなどの熱心な収集家であった。技師ジェームズ・ウォード・バックカード（下段）は、時計製作における複雑なメカニズムに熱狂的な関心を寄せた。  
【当ページ】  
コネリアス・ヴァンダービルト二世夫人は、1883年のヴァンダービルト家の舞踏会で「エレクトリック・ライト」と称する奇抜な衣装を着用した。この衣装は、現代を象徴する白熱電球の発明へのオマージュであった。



らタイムピースを発掘することには、いささかの関心も持っていなかった。むしろ2人は、自らの思いつきや嗜好に従って、個人的な使用のためにすべてのタイムピースを発注したのである。当時、大多数の収集家は、高度な機構や芸術的創造のすべてを時計製作者に一任したが、バックカードとグレースは、詳細にまで立ち入った発注を行った。グレースは、事前にトゥールビヨンから永久カレンダーに至るコンプリケーション機能の仕様はもちろん、細部のディテールまで決定し、設計図面を承認することで知られていた。

ジェームズ・ウォード・バックカードは、人類が機械の時代に入った1863年11月5日に次男として生まれた。彼の父はオハイオ州ウォレンで製材所を経営する叩き上げの実業家であった。機械好きなバックカードは、あらゆる機械装置を集めていた。手先が器用な彼は、何でも分解し、再び組み立てた時には、改良が加えられているのが常だったという。21歳でペンシルバニア州のリーハイ工業大学を卒業し、同大学史上最若年の機械技師となった。1890年、彼は白熱電球のバイオニアであるバックカード電気会社を設立した。常に発明に余念のない彼は、エレベーター、電動回転ドアを含む1000件以上の発明品を、妻のエリザベス・ギルマーと住む大邸宅に保有していた。

1899年、彼はアメリカ市場に初めて高級乗用車を導入したとされるバックカード自動車会社を設立した。同社の乗用車「バックカード」は優美なラインと先進的な設計が特徴であった。バックカードはこれに技師として数々の技術的改良を加えていき、それらはすべて業界標準となった。バックカードは鋭い美的感覚に恵まれ、テクノロジーがもたらす大胆な未来を確信していた。バックカード・モーターの会長は後年、彼についてこう語っている。「未完成さや欠陥は、彼の感受性をひどく傷つけた。バックカードの乗用車は、彼のタイムピース同様、革新的なテクノロジーを内包した美しいオブジェであった。



(上) 1917年に製作されたゴールド仕様のリング・ウォッチは、知られる限りパテック・フィリップがこの時期に製作した唯一のもの。  
(右下) 乗用車「バックカード」は、自動王バックカード自身が発明したハンドルを備えていた。  
(左下) ヘンリー・グレース・ジュニアと妻フローレンス。

これは対照的にヘンリー・グレース・ジュニアは、ニューヨークという土地柄にもかかわらず、公的生活においてはきわめて寡黙であった。もし彼のウォッチ・コレクションがなければ、おそらくグレースが歴史に名を残すことはなかったであろう。しかし私生活のライフスタイルは贅沢なものであった。

グレースは1868年3月11日、ニューヨーク州オレンジで、鉄道、銀行業、および商業によって富を築いた銀行家の家に生まれた。ニューヨーク証券取引所の所長であった彼の父ヘンリー・グレース・シニアは、南北戦争の後、ウォール・ストリートでマクスウェル&グレース社を共同設立した。ヘンリー・グレース・ジュニア



(上) 24の複雑機能を備えた1933年製作の超複雑タイムピース「グレース・ウォッチ」は、それまでのすべての記録を破り、世界一複雑な時計のタイトルを勝ち得た。900個の部品から構成され、表裏に文字盤を持つイエローゴールド仕様のこのタイムピースは、完成までには5年を費やした。  
(中) バックカードが発注した最も著名な時計 (No.198 023)。1927年納入。10の複雑機能を搭載。  
(下) バックカードが所有していた、時計を仕込んだ銀製の握りのついた黒檀製のステッキ。象牙製の取替え用握りが付属している。パテック・フィリップが製作した唯一のステッキ・ウォッチと考えられている。



は父の会社に入り、産業経済を主導する多くの事業に融資し、大いに利益を得た。

1896年、彼は裕福な商品ブローカーの娘、フローレンス・イザベル・プレストンを娶った。妻の家系はシャルルマーニュ皇帝の血統を継いでおり、これは財産と血筋による婚姻であった。夫婦と4人の子供たちは、アーヴィントン・オン・ハドソンの敷地10エーカーの邸宅と、ニューヨーク五番街にあるメゾネットのマンションで、外見上、完璧な生活を送った。夏にはイェール大学アイロンダックスの森林地方にあるグレート・キャンプに専用鉄道車両で避暑に行ったが、そこでの隣人はロックフェラー一家であった。

バックカードがものづくりの人であったとすれば、グレースはものを買う人であった。彼は、自他共に認める美術収集家であり、中国産の希少な磁器の著名な愛好家であった父の元で、勤勉に収集家としての鑑識眼を磨いた。卓越した競技者であった彼は乗馬、ヨット、および射撃に秀でていた。しかし彼の真の情熱は収集であり、その目的はスポーツにおけると同様、勝つことであった。

グレースは、驚異的な鑑識眼に恵まれ、アメリカの革命時代の海戦を描いた版画、フランス製ペーパーウェイトなど、競争者のいない分野で価値あるオブジェを追求した。中国産磁器の分野では、彼の父を凌駕することさえあった。彼の驚異的なコイン・コレクションには、「コインの王」とも呼ばれる1804年鑄造のドル銀貨も含まれていた。彼の喜びは、獲物を仕留める情け容赦のない略奪者のそれであった。

しかし信じられないほどの高さとは裏腹に、グレースのコレクションには、きわめて注意深く覆いがかけられていた。1936年のオークションで、彼が所有するアルブレヒト・デュラー作の版画「アダムとイブ」が1万ドルという驚くべき価格で落札された時、彼を知る狭いサークル以外の人々は、初めて彼が長期間にわたって集めてきた作品の膨大さを知るに至ったのである。



りの両側に並ぶ店々を隈なく見て回り、最高のタイムピースへの鑑識眼を養った。

技術者であったバックカードは、問題点を解決し、製品を改善することに熱意を燃やした。コンプリケーション機能の新しい組合せを発見することは、彼の知性を刺激した。とりわけ彼が入れ込んだのがミニット・リピーターであった。パテックフィリップは彼にとつて傑出したパートナーとなった。1905年、バックカードは、パテックフィリップから知られる限り最初のグランド・コンプリケーション(N°125009)の納入を受けた。それは永久カレンダー、グランド&ブティックソヌリを搭載した18金ゴールド仕様のミニット・リピーター搭載クロノグラフであった。これがかつかけとなり、両者の間には親密な関係が始まった。

長期にわたるバックカードとパテックフィリップの親密な関係からいくつものユニークなタイムピースが誕生したが、いずれも懐中時計ではなかった。1917年に納入された18金ゴールド仕様のリング・ウォッチ(N°174659)は、パテックフィリップがこの時期に製作したこの種のタイムピース

多くの価値あるタイムピースに刻まれている。  
[次ページ]  
[左] ニューヨークのシャタクア湖でヨットに乗るバックカード。(右) 探検好きの彼は、自社の車のテストを兼ねて頻繁にドライブに出かけた。アメリカ18代大統領の遺骸が安置されたニューヨークのグラント將軍墓前を通過するバックカード。

【当ページ】  
[右] グレープス夫妻と下の2人の子供たち、グウェンとジョージ。(右) ヘンリー・グレープス・ジュニアは1896年、裕福な商品ブローカーの娘、フローレンス・イザベル・プレストンを娶った。「幻想より現実を」というモットーを配したグレープス家の紋章は、銀食器、カフリンクス、および彼の所有した

スカレートしていったのである。グレープスは多くの時計を、ティファニー社を通じて発注した。その中にはいくつものユニークなタイムピースが含まれる。パテックフィリップ初期のコイン・ウォッチ(N°812471)はそのひとつである。1904年製造の20ドル金貨の側面に秘密の掛け金が付いており、上面がバネ仕掛けで開いて内部の時計が現れる。その後、懐中時計が流行遅れになると、グレープスの熱狂は腕時計に向かった。彼はパテックフィリップが4個のみ製作したミニット・リピーター搭載トノー型腕時計のうち、3個を所有していた(うち2個はプラチナ仕様)。

しかし1916年、バックカードが数分の1秒単位の時間計測ができる「フッドロワヤント」など16の複雑機能を備えたゴールド仕様のグランド・コンプリケーション(N°174129)の納入を受けたことをきっかけに、2人の紳士の野心は最高に燃え上がった。この驚くべきタイムピースのニュースは時計愛好家の間を駆け巡った。グレープスは、それまで自らもグランド・コンプリケーションを発注しており、その中には、バックカードの「フッドロワヤント」より4機能少ない12の複雑機能を備えた懐中時計(N°174961)が含まれる。これ以後、2人は憑かれたようなペースで時計を注文し始めた。1927年、重い病でクリブランド病院に長期入院中のバックカードは、彼のコレクション中、最も重要とされる著名な「バックカード・ウォッチ」(N°198023)を受領した。この天文懐中時計は、500個の金の星を散りばめ、オハイオ州ウォレンの夜空を克明に再現したパテックフィリップ最初の星座表を搭載

としては、知られる限り唯一のものである。家の近くを散歩しながら革表紙の日記帳に距離、時間、および天気を記録する習慣があった彼は、その翌年、ステッキ・ウォッチ(N°174826)の納入を受けた。この風変わりなタイムピースは、黒檀製のステッキに、時計を仕込んだねじ込み式の銀製の握りが付いており、象牙製の取替え用握りが付属していた。

グレープスの時計への関心は、同階級の多くの紳士たちと同じきっかけで始まった。当時、高級な懐中時計を所有することは地位と富の象徴だったのである。常々鼻息にしていたティファニー社の仲立ちにより、グレープスはパテックフィリップの世界を知ることになる。とりわけ彼の関心をそそいだのは、ジュネーブ天文台計時精度コンクールで優勝したパテックフィリップのタイムピースであった。それは彼の卓越性、スピード、希少性への傾倒を考えれば驚くに当たらない。グレープスは、まるで取り憑かれたように数十個の時計を購入し続けた。パテックフィリップがこれまで3個のみ製作したプラチナ仕様のトゥールビヨン・ミニット・リピーターはすべて彼が購入した。これらはいずれも計時精度コンクールで優勝している。

バックカードがテクノロジーの冒険を楽しんでのに対し、グレープスは卓越性の象徴としての、彼が思いのままにデザインし、掌中にできる懐中時計を愛した。やがて彼の関心は、最高精度のクロノメーターから、できるだけ多数のコンプリケーション機能を搭載したタイムピースへと移っていった。彼の要求は、「各ジャンル毎にひとつの時計」から「各ジャンル毎に最高の時計」へ、そしてさらには「どこにもない時計」へとエ

一方、グレープスは、この頃パテックフィリップと秘密の会合を行ったと伝えられている。彼の注文は「考えられぬほど高度で、可能な限りのコンプリケーション機能を搭載した世界一複雑な時計」であった。この時から超複雑タイムピース「グレープス・ウォッチ」(N°198385)を完成させるための5年におよぶ冒険がスタートしたのである。900個の部品から構成され、24の複雑機能を備え、表裏に文字盤を持つこの驚異的な超複雑タイムピースは、今日もなお世界で最も追い求められる時計のひとつであり続けている。

超複雑タイムピース「グレープス・ウォッチ」はグレープスに最終的な勝利を与えたが、それは新しいスタートをも意味した。今から1世紀前にバックカードとグレープスにより発注された超複雑タイムピースの一群は、きわめて賞賛すべき伝統を残した。それは時計製作のDNAとなって継承され、1989年、パテックフィリップ創業150周年を記念して創作されたキャリバー89から、2001年に発表されたスカイムーン・トゥールビヨン、そして2014年のグランドマスター・チャイムに至る、今日の数多くのグランド・コンプリケーションとなって結実したのである。これらはゴールドのケースに収められ、過去の貴重な史実を今日に伝える、歴史の生きた証である。

「パテックフィリップマガジン・エクストラ」(patek.com/owners)にて、この記事の特別関連コンテンツを閲覧いただけます。

PHOTOGRAPHS: © STACY PERMAN, A GRAND COMBINATION: THE RACE TO BUILD THE WORLD'S MOST LEGENDARY WATCH (KIRIA BOOS/SIMON & SCHUSTER)